

## 新システムの概要

茨城大学バスケットボール部

顧問 加藤 敏弘

(1999.8 執筆)

昨年から新たな飛躍を目指して、新しいシステムを導入しました。こうした活動形態で部活動を実施しているのは、日本の大学の中でおそらく茨城大学バスケットボール部だけでしょう。この結果が凶と出るか吉と出るかはわかりませんが、もう後戻りはできません。部員全員がこのシステムの真のねらいを理解し、その利点を最大限活用してくれることを期待しつつ、部員とともに常に改善していきたいと考えています。

(1) シーズン制の導入：年間を次の3つの時期に分け、それぞれの活動形態を変えた。

a. プレ・シーズン(4月～6月)

新学期を迎えメンバーが流動する時期。そこで、誰もが気軽にプレイできる場とバスケットボールの技術や戦術を学習できる場を広く一般の学生にも提供。火・水曜日がピックアップゲーム、金・土曜日がクリニック、日曜日が対外試合。多くの人々に開かれた活動とするねらいがあるが、一方で北関東五大学大会やトーナメントなどがあるため、チームとしての活動も余儀なくされ、学生の間で混乱が生じている。茨城大学の学生であれば誰もがプレイをする権利を持っていること、お互いの権利を守るためにバスケットボール部として果たすべき義務と責任があることを部員に理解してもらいたいが、具体的にどうすべきかがなかなかつかめず、暗中模索中。

b. シーズン(6月下旬・8月～11月)

6月下旬から火・金曜日に走り込みを中心にした体カトレーニングを全6回実施。水曜日は入念なワークアウトからピックアップゲーム、土曜日はシューティングを実施。ここから本格的なチームづくりが始まる。それまでのように自由参加ではなく、チームの一員として全員が必ず活動に参加することが義務づけられる。

7月中旬に試験期間休みを入れ、7月末から関東甲信越大会向けの練習、関東甲信越大会、夏季合宿、東京遠征を経て9月から10月にかけてリーグ戦。10月末に社会人大会後期の試合があり、その大会をもって4年生から3年生以下のチームへと移行。但し、秋季北関東五大学大会へ向け、4年生をコーチ陣として1ヶ月間練習を継続。この間に4年生には3年生以下に4年間学んできたことを惜しみなく後輩たちに伝えてもらう。

c. オフ・シーズン(12月～3月)

12月に学内バスケットボール大会を企画・開催。部員には大会運営の苦労や審判の難しさなどを味わってもらい、一般学生にはバスケットボール部の雰囲気味わってもらいたい。過去2回開催し、大盛況。こんなにバスケットボールを愛する人たちがいるのかと思うほどであるが、残念ながら部員の増加には直接つながらないことも判明。日本の大学

の中ではかなりユニークな活動をしている茨城大学バスケットボール部であっても、「部活動」という従来からのイメージを払拭することができず、中学・高校の部活動の在り方にも疑問。

1～3月、部員には精力的にアルバイトを奨励。月々1万円づつ3万円の部費を徴収。この部費によって4月の登録料や大会参加料などをまかなう。2～3人の組を作り筋力トレーニングを各自継続。週に1度は集まってピックアップゲームを行う。2月の勝田マラソンには全員参加を義務づけているが、一昨年あたりから故障を理由に参加者が減少。もう一度この勝田マラソン参加の意義を理解してもらう必要がある。

## (2) バスケットボール部の組織と役割の明確化

プレシーズン採用との関係で、バスケットボール部員であること、バスケットボール部のスタッフであること、プレイヤーであること、男子のチームのメンバーであること、女子のチームのメンバーであることの区別を明確にする必要が出てきた。特にスタッフの役割が今まで以上に重要となり、その果たすべき役割が非常に大きくなってきている。とは言え、プレイヤーですら確保できない状況の中、スタッフとして部に関わってくれる人材は少なく、本年度2名の1年生スタッフを加えることができたことは大きな収穫である。

同好会や愛好会などとの関係やOB・OG会との関係を今一度再構築し、日本の歴史と風土に適しながらも、新しい時代に先駆けた組織づくりを実現していきたい。